

# オンライン授業における大学の歴史教育の可能性

徳橋 曜 笹田茂樹

# オンライン授業における大学の歴史教育の可能性

徳橋 曜<sup>1</sup> 笹田茂樹<sup>2</sup>

## A Potential of the Historical Education in Online Lectures

Yo TOKUHASHI Shigeki SASADA

### 概要

2020年の新型コロナ禍によって教育現場は大きな転換を迫られた。同年の前学期、殆どの大学においては同時双方向やオンデマンドでの授業が主体となり、実習や実験を必須とする教育・研究分野について当面の活動が停止された。筆者は2020年度前期にオンライン授業を行うなかで、オンライン授業は対面式授業に比して必ずしも劣ったものではなく、止むを得ず行われる後者の代替物だと考える必要はないのではないかと実感するようになった。むしろオンライン授業という方法は、うまく利用すれば、これまでの対面式授業でできなかったことを可能にするのではないかと。本稿では、2020年度前学期に実施したオンライン授業の結果と、それらの授業で行った学生アンケートの回答、そして他大学が発表しているオンライン授業の検証結果とに基づき、筆者の専門分野である歴史教育という側面から、オンライン授業の活用の可能性を検討した。

キーワード：世界史，高等学校，大学，歴史教育，オンライン授業，

Keywords：World History, High School, University, Historical Education, Online Lessons

### I. はじめに

2020年の年頭から世界中で進行していった新型コロナウイルス（COVIT-19）の流行は、教育現場に大きな影響を与えた。幼稚園から大学・大学院に至るまで、すべての教育現場で病気への対応を迫られ、高等学校以下の大半の教育現場では当面の休校と自宅学習が実施され、大学・大学院においては同時双方向あるいはオンデマンドでの授業が試行されることとなった。本稿を執筆している2020年初秋の段階でも、病気の予防や治療にまだ確実な展望が得られないなか、後学期において対面式授業を基本とすると決定した大学、非対面式授業を基本と定めた大学、対面式授業と非対面式授業を混在させる大学、全面的に非対面式授業のみと定めた大学と、対応もまちまちである。

近年、受験産業においては大手予備校をはじめとして遠隔授業が急速に普及してきた。また文部科学省はGIGAスクール構想等、学校現場におけるICTの活用を推進しており、特に全体的な人口減少や過疎化への対応を念頭とした検討（「人口減少社会におけるICTの活用による教育の質の維持向上に係わる実証事業」）も行われている<sup>1</sup>。しかしながら、実態として、通常の学校現場における遠隔授業の実施は限定的であった。

大学においても状況は同様である。確かにこの10年

以上にわたり、コンソーシアムを形成する大学間での双方向遠隔授業システムの構築などが、学術情報ネットワーク（SINET）を活用して実施されてきた。これらはもっぱら、相互の大学の教室同士を通信でつなぐという発想で行われたが、設備の整備の問題、また通信速度やセキュリティの問題などもあって、十分に普及したとは言いがたかった<sup>2</sup>。

ところが、2020年4月、新型コロナウイルス流行の急速な拡大により事実上の閉鎖を余儀なくされた大学の多くは、急遽、非対面式授業の実施に踏み切ることとなった。オンライン会議システムを提供するグーグルやZoomビデオコミュニケーションズが、こうした世界的な遠隔授業実施の流れに協力したことも、日本における双方向遠隔授業の実施を後押しした。4月の時点では使用するソフトのセキュリティに対する不安、学生の通信環境の不均等によって受講環境に差異ができてしまうことへの懸念、大学のサーバー等の設備に関する不安など、様々な問題が指摘されていたが、文部科学省の当面の措置の設定・規則整備を受けて、多くの大学がオンラインでの授業を導入した。

4月から5月にかけては全国の大学の教員から様々な問題点が発信され、議論されていた。フェイスブックでは、「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」というディスカッ

<sup>1</sup> 富山大学人間発達科学部 <sup>2</sup> 富山大学人間発達科学部

ション・グループが作られ、全国の大学教員を中心に2万人を超える登録者があった<sup>3</sup>。このように、主に教員の試行錯誤と改善を経ながら、遠隔授業が進められていったのである。そうしたなかで筆者の所属する富山大学においては、授業は同時双方向もしくはオンデマンドで行うこととされ、双方向のオンライン授業についてはZoomが、資料の配布やオンデマンドでの授業についてはMoodleが使用された。

このように非常事態への対応として図らずも導入された非対面式授業は、対面式授業の代替措置として止むを得ず行われるものと見なされ、対面式授業よりも質の劣ったものと捉えられる傾向にある。オンライン授業は対面式授業と同額の学費に見合っていないとして、学費返還を求めるような運動や議論も、特に2020年の4～5月には見られた<sup>4</sup>。しかし、非対面式の授業が始められて半年を経ると、オンライン授業のメリット・デメリットを検証しようという動きも生じてきた。オンライン授業を単に対面式授業の代替として否定的に捉えることをやめ、そのメリットを積極的に評価しようというものである。筆者自身は2020年度前期に、西洋史に関連した3つの講義をZoomを利用したオンラインで実施し、そのメリットを認識した。本稿では授業で実施したアンケートの結果も踏まえて、オンライン授業の可能性を考えていく。

## II. 授業の実施とアンケートの内容

授業はZoomを介した同時双方向型の形を取ったが、実施内容において従来と変えたところは基本的にない。教科書は使用せず、配布した資料を参照させながら、パワーポイントで図表や画像を提示し、講義していく形である。勿論、通常であれば授業者が教室で 프로젝タを操作して画面を見せ、また随時、補足の参考資料を渡したり、史料の実物に触らせたりしながら、学生に直接語りかけるところを、PCやタブレットの画面を通してパワーポイントの資料や事物を見せながら、講義をした点が異なる。講義中に中世の銀貨や16世紀の印刷本、18～19世紀の陶磁器の実物を見せる、あるいはオーグオイルを灯油として燃やす実験をして見せるといったことも行った。こうした実演はそれなりに学生の関心を引き、後述する学生アンケートの回答で、対面授業であれば「本など実物を手に取って拝見できる機会が多くあったと思う」という感想を引き出すことになったようである。

従来であれば教室でプリントとして直接手渡した資料は、Moodleにアップロードしておき、これを学生各自がダウンロードする形を取った。これらの資料は、タブレットやPCの画面で見るとプリントアウトしておくことを前提としておいたが、プリントアウトせずに利用していた学生は少なくなかったようである。

受講者はビデオ・マイク共にオフの状態入室し、授

業中に質問する、授業者の問いかけに回答する等の必要に応じてマイク・オンにさせた。ビデオについては任意とした結果、質問などの時にもビデオ・オンにする受講者はいなかった。また、受講者全体に対して行う授業中の問いかけや簡単な課題に対する回答には、Zoomのチャット機能を活用し、チャットのやり取りは授業者・受講者のいずれも「全員宛」とした。こうすることによって、受講者は自分達相互の意見を見ることができる。また、授業者は受講者の回答を一覧することが可能であり、しかも誰の回答であるのかを把握できる。セキュリティの観点（部外者が紛れ込んでいわゆる「爆撃」をすることを防ぐ）から、学生達は、Zoomへの使用者登録の際に本人が同定できるような名称を用いるように指導されているので、基本的に授業者も受講者もZoomのチャット一覧を見て、誰の発言であるかを目視できるのである。謂わば電子的に机間巡視ができるわけで、しかるべき回答を選んで、その回答をした受講者に、さらに質問したり、回答の記述の意図を確認したりすることも可能である（その場合の受講者との質疑応答は、マイクをオンにさせて音声で行った）。

そして、毎回の授業後には、3日以内に授業の振り返りを提出させた。振り返りの書式ファイル（Office Wordファイル）はMoodleからダウンロードさせ、提出もMoodleを介して行わせた。Wordを使用しない受講生に配慮して、テキストファイルでの提出も認めたが、各授業ともテキストファイルで提出した者は1～2名であった。

従来の筆者の授業では、必ずしも毎回、振り返りを提出させることはしなかった。通常、筆者を含めて多くの教員は、対面で授業をするなかで受講者の顔や反応を見ながら、理解度を探っている。しかし、遠隔授業ではそれが困難であるため、受講生の理解度を計り、また質問を受け付けるためにも、毎回の振り返り提出を義務付けたのである。書式ファイルに、「授業の内容に加えて、あなたの感じたこと、考えたことも書いてもらえると嬉しい」と添えておいたところ、感想や疑問、内容に関する質問などが多く寄せられる結果となり、これは予想以上に授業者にも受講者にも有益であった（この点については後述する）。なお、授業の振り返りというものは大抵、授業の最後に数分間で書かせて提出させるものであるが、今回は教室で提出させるものではないため、むしろ復習や思考のための時間を取った上で提出させることを意図し、休日を挟んだ3日間（いずれの授業も金曜日に行われるため、振り返りの提出期限は翌週の火曜日午前0時とした）を与えた。

さらに、この振り返りに受講者達が書いてきた内容を踏まえて、理解が足りないあるいは誤解した受講者がいた、と判明した点について訂正や補足をし、また質問や感想に応えるために、振り返りへの回答を作成した。これを次回の授業までにMoodleにアップロードして参照

させたのである。当初、そうした補足や質問への回答は毎回の講義の冒頭で行っていたが、振り返りでの受講生の反応が予想よりも良かったために回答すべき内容も増え、講義時間に影響が出てしまうまでになったため、基本的には「振り返りへの回答」を受講生各自がダウンロードして読んでおくという形に変更した。

以上のような形で15回の授業を実施したが、15回分の授業が終わったところで、アンケートを行った。筆者は毎年、「高校と大学の世界史・外国史教育に関するアンケート」を実施している。2020年度前期については、授業資料等と同様にMoodleにアンケートのファイルをアップロードし、受講者にはこれをダウンロードして記入の上、8月13日～18日の間に筆者宛のメールに添付して回答することを要請した。アンケートの質問項目の構成は基本的に2019年度のもの踏襲しているが、オンラインでの授業についての項目を新たに加えた。

アンケートの結果、3講義を合わせて延べで合計35名の学生から回答を得た。一人で複数の科目を受講している学生にはそれぞれについてアンケートを提出してもらったが、高等学校での世界史履修に関わる質問項目(4～7)については、一つの科目でのみ回答することとした。したがって4～7の項目については延べ人数ではなく、実質人数(19名)である。予想したところではあるが、教室でアンケートに回答してもらう場合よりも、回答率ははるかに悪い。また2020年度は筆者の教養教育の担当が後学期になったため、教養教育の授業は今回のアンケートの対象にはならなかった。そのため、回答者に1年生は含まれておらず、また回答者の所属も人間発達科学部のみである。回答者の総数(実数)は計23名であった。

例年通り、質問1a(学年)・1b(学部)・2(高等学校での世界史履修の有無)の3項目を最初に設定し、質問2で①と回答した者(世界史履修者)には以下の質問3～14に答えてもらった。14については質問2で②と回答した者(世界史未履修者)3名(回答数3)も回答してくれた。合わせて、未履修者には追加で質問8及び11～13への回答を依頼し、1人(回答数2)の回答を得た。

#### 実際のアンケートの質問

1a) あなたの現在の学年は?

- ① 1年生 ② 2年生 ③ 3年生 ④ 4年生以上

1b) あなたの学部は?

- ① 人文学部 ② 人間発達科学部 ③ 経済学部 ④ 理学部 ⑤ 工学部 ⑥ 医学部 ⑦ 薬学部 ⑧ 芸術文化学部 ⑨ 都市デザイン学部

2) 高校で世界史を履修しましたか?

- ① した → 質問3～14へ  
② しなかった → 質問15～17へ

以下の質問3～14には、質問2で①と回答した人が答えて下さい。

3) 高校での世界史の履修事情について

3-a) 高校の何年次に履修しましたか?

- ① 1年生の1年間 ② 1～2年生の2年間 ③ 2年生の1年間 ④ 2～3年生の2年間 ⑤ 3年生の1年間 ⑥ 1～3年生の3年間 ⑦ それ以外

3-b) 履修したのは世界史AですかBですか?

- ① 世界史A ② 世界史B ③ AかBか分からない ④ AとBの両方

3-c) どのような内容でしたか?

- ① 古代から近現代まで網羅的に学習した ② 18世紀以前を主に学習した ③ 19世紀以降を主に学習した

3-d) 3-bで①と回答した人にうかがいます。世界史Aの履修はどんな条件でしたか?

- ① 学年の全員が世界史Aを履修することになっていた  
② 「理系」のコースの生徒はAを「文系」のコースの生徒はBを履修することになっていた  
③ わからない

3-e) 3-bで②と回答した人にうかがいます。世界史Bの履修はどんな条件でしたか?

- ① 学年の全員が世界史Bを履修することになっていた  
② 「理系」のコースの生徒はAを「文系」のコースの生徒はBを履修することになっていた ③ わからない

4) 高校時代、世界史という科目が好きでしたか?

- ① 好きだった ② どちらかといえば好きだった  
③ どちらかといえば嫌いだった ④ 嫌いだった

5) 質問4で①ないし②と回答した人にうかがいます。好きだった主たる理由は何ですか?複数回答可です。

- ① 内容が面白かったから ② 内容に特に興味はなかったが、試験では点数が取れたから ③ 先生の個性や授業の進め方が自分に合ったから

6) 質問4で③ないし④と回答した人にうかがいます。嫌いだった主たる理由は何ですか?複数回答可です。

- ① 内容に興味を持てなかったから ② 覚えることが多くて面倒だったから ③ 先生の個性や授業の進め方が自分に合わなかったから

7) 自分の過去の世界史学習を振り返ってもっとこういう点を学びたかった、あるいはもっと積極的に学ぶべきだったと思うことはありますか?

- ① ある(具体的に書いて下さい) ② ない

8) あなたはなぜこの講義を受講したのですか?主たる理由を一つ選んで下さい。

- ① 内容に興味があったから ② 興味はないが、履修する必要があったから ③ 興味はないが、簡単に単位が取れそうだったから ④ その他

9) この講義の内容は高校の世界史とつながっていると思いますか?

- ① 思う(どんな点でそう思うか具体的に書いて下さい)  
② 思わない

10) この講義の内容が他の講義やあなたの社会認識・関心とつながっていると感じたことはありましたか?

- ① ある(どんな点においてか具体的に書いて下さい)

② ない

11) この講義は Zoom を介したオンライン授業でしたが、通常の対面授業をイメージして比較してみると、この講義については以下のどの感想が当てはまりますか？

- ① 対面授業だったら、もっと分かりやすかったと思う
- ② Zoom を使った授業だったおかげで、むしろ分かりやすかったと思う
- ③ どちらでもあまり変わらなかったと思う  
(どんな点でそのような感想になったのか、できれば具体的に書いて下さい)

12) 毎回の振り返りは自分の役に立ちましたか？

- ① 役に立った (どんな点でか具体的に書いて下さい)
- ② 役に立たなかった

13) 振り返りへの回答は基本的に質問への回答ですが、自分のためになりましたか？

- ① なった (どんな点でか具体的に書いて下さい)
- ② ならなかった

14) あなたはこの講義で、提示された情報や資料から「考える」ことをしましたか？

- ① した (具体的に書いて下さい)
- ② 特にはしなかった

一方、質問 2 で②と回答した者 (世界史未履修者) には、以下の質問 15～17 に答えてもらった。

#### 実際のアンケートの質問

15) 高校で歴史関係の科目を履修しましたか？

- ① 日本史を履修した
- ② 歴史関係の科目は全く履修しなかった

16) 高校で履修したと記憶している社会科関係の科目全てを記入して下さい。

- ① 日本史 ② 世界史 ③ 地理 ④ 倫理 ⑤ 現代社会
- ⑥ 政治・経済

17) この講義を受講して、高校で世界史を学んでおけばよかったと感じたことはありますか？

- ① ある (具体的にどんな点でそうしたことを感じたか、書いて下さい) ② ない

質問 15 は、「世界史を履修しなかった」と回答した学生に、世界史の代替の形で日本史を履修したのかどうかを尋ねるものである。いわゆる理科系の学部の場合、実際には高等学校で全く歴史関係の科目を履修していないことがあるからである。

そして質問 16 は、「世界史を履修しなかった」と回答した者の認識・記憶の信頼性を確認するために設けた。徳橋曜 (2019) での世界史未履修者の分析について、実際には履修しているが履修したことを忘れてしまったケースが一定数含まれるのではないかと、という批判を受けたことから、回答者の記憶を確認しようと考えたのである。学生がこの質問に具体的に回答できているならば、履修した科目を記憶しているわけで、その中で世界史を履修した事実のみを忘却したとは考えるのはむしろ不自然である。従って、実際に世界史を履修しなかったと結

論づけられよう。

### Ⅲ. アンケートの結果からの抜粋

2020 年度は回答の実数が少ないので数量的な分析は難しい。また質問項目は今後の分析のために、2019 年度までのものと基本的に合わせており、必ずしもオンライン授業の有効性を問うために設けたものではないので、その中から本稿の視点に関わる項目を抽出して、回答結果 (人数は、対象とした 3 つの講義を合計して計算している) を示すなら、以下ようになる。なお、回答者数は特に注記しない限り、延べ人数である。

※質問 1～2 の人数の割合の分母は回答者の延べ総数 (35 名) である。

#### 質問 1a) 学年

- ① 1 年生：0 ② 2 年生：24 名 (68.6%)
- ③ 3 年生：8 名 (22.9%) ④ 4 年生以上：3 名 (8.6%)

#### 質問 2) 世界史を履修したか？

- ① した：30 名 (85.7%) ② しなかった：5 名 (14.3%)

なお、実数で見ると、①に該当する者 (履修者) は 19 名 (82.6%)、未履修者 4 名 (17.4%) である。

※質問 3 については、人数の割合の分母は世界史履修者の実数 (19 名) である。

#### 質問 3-a) 高校の何年次に履修したか？

- ① 1 年生の 1 年間：11 名 (57.9%) ② 1～2 年生の 2 年間：0
- ③ 2 年生の 1 年間：2 名 (10.5%) ④ 2～3 年生の 2 年間：4 名 (21.1%) ⑤ 3 年生の 1 年間：0
- ⑥ 1～3 年生の 3 年間：2 名 (10.5%) ⑦ それ以外：0

#### 質問 3-b) 履修したのは世界史 A か世界史 B か？

- ① 世界史 A：11 名 (57.9%) ② 世界史 B：5 名 (26.3%)
- ③ A か B か分からない：1 名 (5.3%)
- ④ A と B の両方：2 名 (10.5%)

#### 質問 3-c) どのような学習内容であったか？

- ① 古代から近現代まで網羅的に学習した：13 名 (68.4%)
- ② 18 世紀以前を主に学習した：3 名 (15.8%)
- ③ 19 世紀以降を主に学習した：3 名 (15.8%)

#### 質問 3-d) 世界史 A の履修条件

- ① 学年の全員が世界史 A を履修することになっていた：9 名 (69.2%)
- ② 「理系」のコースの生徒は A を「文系」のコースの生徒は B を履修することになっていた：0
- ③ わからない：3 名 (23.1%) 無回答：1 名

※分母は A 履修者の総数 13 名 (A・B 両科目履修者 2 名を含む)

#### 質問 3-e) 世界史 B の履修条件

- ① 学年の全員が世界史 B を履修することになっていた：2 名 (28.6%)
- ② 「理系」のコースの生徒は A を「文系」のコースの生徒は B を履修することになっていた：1 名 (14.3%)
- ③ わからない：2 名 (28.6%) 無回答：1 名

※分母は B 履修者の総数 7 名 (A・B 両科目履修者 2 名を含む)

※質問 11～14 の割合の分母は回答者の延べ総数 (35 名) である。

**質問 11) オンラインで実施された当該講義について、通常の対面授業であったほうが良かったと感じたか？**

※無回答 3 名

①対面授業だったら、もっと分かりやすかったと思う：11 名 (31.4%)

**理由**

- ・音声途切れることがあったし、画面を見ているのを目の前で、対面で授業をきけるのでは集中力の持ち具合が異なった。画面を見続けるのは目も疲れるので、対面で受けたいと思った。
- ・授業中に質問するのははばかれるように思った。しかし振り返りで疑問に答えてもらえたのでそれは非常に良かった。
- ・音声途切れたり、目が疲れてしまったり、集中力が対面の時よりも持ちにくかったりした点
- ・内容が早すぎて理解が追いつかないところがあった。
- ・スピードが少し遅くて理解が追いつかなかった点。
- ・[対面の方が] 授業に集中できる環境が整っていたと思う。本など実物を手に取って拝見できる機会が多かったと思う。

・図や絵などが載った本などを実際に手に取って見ることができたと思うから。

② Zoom を使った授業だったおかげで、むしろ分かりやすかったと思う：11 名 (31.4%)

**理由**

- ・たくさんの追加資料を用意して下さったおかげでオンラインでも分かりやすかった。
- ・私はともかく、非対面であることによって、質問がしやすいというメリットはあったと思う。また、この講義がいわゆる講義型に分類されるということは要因であると思う。
- ・自分なりにわからないところを調べることができた。集中できた。
- ・資料がみやすかった。集中できた。分からない部分について自分なりに調べることができた。
- ・Zoom だと、スライドがみやすくて授業後の振り返りで理解できなかった部分については質問することができたから。
- ・授業の振り返りで質問する機会が十分に設けられていて、対面授業よりも分からないことや疑問に思ったことを聞ける点において理解が深まりやすかったように思います。
- ・毎回の授業の振り返りで質問をする機会が十分に与えられていたので、対面授業よりも理解が深まったのではないかと思います。
- ・チャットの方が他の人の意見が通常よりも出ている印象があり、他の人の考えを聞くことで自分の考えを深めたり新たな見方を得ることができたから。
- ・ノートパソコンで授業を受けながらデスクトップパソコンでノートがとれたので、振り返りを書くときに授業

ノートを参照しやすく効果的に復習できた。配布資料を印刷せずとも直接書き込めるので便利だった。

・授業ノートがとりやすく、資料も参照しやすかったという点と、実際に先生の持っている資料を示して説明して下さったのが記憶に残っている。

③どちらでもあまり変わらなかったと思う：10 名 (28.6%)

**理由**

- ・資料を見ながら受けることができる点ではどちらでも同じだと思ったから。
- ・PC の画面に向き合う時間が増えて、疲労感を感じたり集中力が持続しにくかったりしたという個人的な問題はあるものの、授業内容はむしろひとりひとり平等にフォーカスされる機会が与えられているので、よかったのではないかなと思う。
- ・講義者が語る授業は対面でも対面でなくても価値に変化はないと思うから。

**質問 12) 授業後に提出する毎回の振り返りは、自分の学習の役に立ったか？**

①役に立った：27 名 (77.1%)

②役に立たなかった：5 名 (14.3%) 無回答：3 名

**役に立った点**

- ・自分の学びを確認する場となった。
- ・前の授業でも思い出すことができたから。
- ・自分の印象に残っている事柄をもう一度自分のなかで整理し、自分の言葉で表すことでより理解が深まったと感じた。
- ・その回で学んだことの復習にもなったし、わからなければ質問できるシステムになっていて、役立った。ただ、Word で打つのにかなり時間がかかるので、量的には負担だった。
- ・授業で学んだ内容に対して、自分の立場や意見をじっくり考えることにつながった。
- ・質問や疑問について解決できる貴重な機会だった。
- ・内容の振り返りができたから。
- ・授業の振り返りの機会が与えられることで学びが深まった点。
- ・復習になったし、分からないことは質問できたので良かった。ただ、Word で作成するのにかなり時間がかかるので、負担は大きかった。
- ・一度聞いただけではよくわからないこともあったので、自分でまとめなおすことで復習になった。しかし、内容が難しいということもあり、すべてを理解することはかなわなかった。
- ・授業後の頭を自分自身で整理できる。
- ・1 回自分の頭で整理することができて、授業内容を頭に残すことができた。
- ・授業内容をまとめつつ復習することができた。
- ・学んだことを自分なりに整理できた。また、授業内容を思い出すことにつながった。
- ・授業を受けっぱなしにならず、その日に学んだことや

理解したことなどを振り返ることで、学習内容が定着しやすかったように思います。

- ・毎回の授業で何を学ぶことができたか、何を知ることができたのか振り返りができる点。
- ・後から振り返りを見返したときに、どんなことを学んだのかということの思い出しやすい点。
- ・復習になり、自分の認識を深めたり、改めて書くことで自分の勘違いに気づいたりできたから。
- ・授業内容を復習する機会が与えられていて内容理解がしやすかった。質問にも丁寧に答えられており参考になった。
- ・振り返りで書くべき内容について授業中に考えながら聞いていたので、より深く、聞き漏らしがなく受講できたと思う。
- ・授業で取り上げる時代や地域の範囲が大きく変わるところで、振り返りの際に資料やノートを見て再整理できたので、最終レポートの時に記憶が残っていたため書きやすかった。

**質問 13) 毎回の振り返りでの質問等に対して翌週に提示される「回答」は、自分のためになったか？**

- ①なった：27名 (77.1%)  
②ならなかった：5名 (14.3%) 無回答：3名

**ためになった点**

- ・疑問に思ったことが分かった。
- ・このような考え方があったのだと知ることができたから。
- ・自分にはなかった視点、そしてその回答は見ていて新たな発見をもたらしてくれた点。
- ・自分の分からなかったことが分かるようになったし、他の人の質問への回答も見られるシステムになっていたのが新たな気づきもあってとてもよかった。
- ・他の生徒がどのようなことを疑問に思ったのかを知ることが出来たり、他者の意見とそれに対する先生の回答やフィードバックを得られたりすることで、新たに学ぶことが増えた。
- ・他の人の質問も見られてその回答も読むことが出来たので、自分でも気が付かなかったことに気づききっかけにもなった。
- ・他の人の疑問への回答によってさらに知識を得ることができたから。
- ・他の人の疑問で自分が考えることのなかった内容を知ることができた点。他の人の疑問への回答によってさらに知識を得ることができた。
- ・分からないことを質問したら次の回で解決できたし、他の人の質問とその回答を見ることができて新たな気づきがあってよかった。
- ・自分と同じ目線で講義を受けている人の質問なので、おおよそ自分もよくわかっていなかったり、質問を聞いてそういえばなんだろうと考えなおしたりすることが多かったので、よかった。
- ・自分の気づかなかった疑問点も見つかることでさらに

知識が増えた。

- ・先生が丁寧に質問に答えてくださり、疑問が解けた。
- ・疑問が解けた。
- ・より詳しく内容について説明されていて学びを深めることができたから。
- ・自分自身も何回か疑問に思ったことを質問し、それに回答してくださったおかげで、モヤモヤ感がなくなり、また、他の受講者さんがどのようなことに疑問を抱いているのかを知ることや自分以外の質問もとても参考になりました。
- ・疑問に持った点を解説付きで答えてくれたため、より深く理解できた点。
- ・自分 [へ] の回答を文章にすることで、その質問に対してどのように感じたかということを改めて確認できる点。
- ・学んだ内容をより深めることができたから。
- ・毎回丁寧に回答してもらえたので、ためになった。
- ・ちょっとした、授業に深く関係するわけではない部分にもこたえていただき、すっきりした部分も多かった。毎回自分の質問に答えていただいたのが嬉しく、他の人に対する質問への答えも興味深かった。

**質問 14) 当該講義で「考える」ことをしたか？**

- ①した：23名 (65.7%) ②しなかった：9名 (25.7%)  
無回答：3名

**具体的な内容**

- ・提示されたものを頭に入れると自然と、考えたり、批判したりした。
- ・提示された絵からその時代の考えや文化を感じ取ることができたと思う。
- ・分からないことや忘れていたことについて自分なりに調べて考えてみた。
- ・とくに授業のなかで、先生が問いかけたことについて自分で考えたり、環境問題はこれが全てであるというような正しい答えがないことが多いので、自分で直感的に考えたこと以外にもどのような考え方ができるのかということを実践したり、考える機会はあった（毎回しっかり実践できたわけではないが）。
- ・資料からわかることや説明されたことを自分の中で組み合わせ理解を深めた。
- ・補足説明と資料を照らし合わせた因果関係などを考えることができた。
- ・自分なりにどういうことか分からないときは調べて考え、どうしても分からないときは質問していた。
- ・レジュメは因果関係を必ずしも明確に記されていないので、考える必要があった。
- ・資料から当時の暮らしや人々の心情はどのようなものであったか考えることができた。
- ・なぜそのような思想に至ったのか、これからの目標はどのような物か、時には現代と関連付けて考えることができた。
- ・先生が授業中に質問したことに對して考えたり、現代

と関連させながら考えたりした。

・初めて見る資料をじっくりと見て、どういう内容なのかを考えた。

・歴史的な差別の是非について考えた。

・主に資料に載せられている図はどのようなことを示しているのかやどんな意図があるのかについて考えるようにしていました。

・資料や図には作成者の考えや意図が反映されていると思うので、それは何かを考えるように心がけていました。

・先生から質問として出されたことについて考えた。

・質問に対しては考えた。

・私は高校で世界史を履修しなかったもので、初めて知ることや学ぶことが多くありました。その分、掲示された情報や資料を見て、読んで、なんでだろう?と考えることも多かったです。例えば1番最近の授業だと、「なぜトマトは最初、食用としてではなく観賞用として扱われていたのだろう」など。

※質問15以下は、世界史未履修者を対象とするが、割合の分母は延べ回答数(5名)ではなく実際の回答者の人数(4名)である。

#### 質問15) 高等学校で歴史の科目を履修したか?

①日本史を履修した: 4名(100%)

②歴史関係の科目は全く履修しなかった: 0

#### 質問16) 高等学校で履修した社会科関係の科目

※複数回答を可としたので、割合は示さない。

①日本史: 4名 ②世界史: 0 ③地理: 0

④倫理: 2名 ⑤現代社会: 4名 ⑥政治・経済: 1名

①と⑤を履修したと回答した者が2名、①・④・⑤を履修したと回答した者と①・④・⑤・⑥を履修したと回答した者がそれぞれ1名いた。回答者の全員が、自分が高校で履修した科目について明確に答えており、世界史を履修しなかったという彼らの記憶は、信頼するに足ると判断する。

#### 質問17) この講義を受講して、高校で世界史を学んでおけばよかったと感じたことはあるか?

①ある: 3名(75.0%) ②ない: 1名(25.0%)

#### 具体的な内容

・歴史的な興味深い話(例えば交易や道具)を聴いて面白いなと思ったから。

・あらゆる単語が初見なので理解が難しい。時間がかかる。

・ヨーロッパの歴史について学ぶうえで、過去の地理関係や現在とは異なる国家の名前など基礎知識は必要であり、そういった知識があればより深い理解につながると思う。

・一貫校で理系だったので中学2年以降世界史に触れておらず、自分の興味がある分野以外忘れていた部分が多かった。環境に関する歴史という点だけみても、知識があれば理解が深まる部分は多かったと思うので、そういった点で学んでいればよかったかなと感じた。

## IV. 他大学におけるオンライン授業の評価

半年間、富山大学を含めた全国の大学が対面授業を断念し、その代替措置としてオンライン授業を行ってきた。7月に公表された文部科学省の調査によれば、7月1日の時点で授業を実施していると回答した大学(短期大学・専門職大学を含む)・高等専門学校は1069校で、そのうち全面的に対面授業としていたのは16.2%に当たる173校であり、それ以外の大学・高専は対面授業と遠隔授業の併用(60.1%・642校)ないし遠隔授業のみ(23.8%・254校)であった<sup>5</sup>。前期の授業期間が終わり、この未曾有の経験の検証が始まりつつある。

朝日新聞と河合塾による共同調査(回答652大学)によれば、多くの大学が、実験・実習・実技系科目への対応、学生の通信環境・ICTスキル、学生の学ぶ意欲・メンタルケア、試験・評価方法、そして教員のオンライン授業の理解・習熟に課題があると回答する一方、授業参加に対する学生の前向きな態度やオンデマンド型の授業の利便性を積極的に評価しているという<sup>6</sup>。特に学生の授業態度については、同時双方向型授業でのチャット機能の活用効果が注目され、「学生からはオンラインの方がかえって発言しやすいという声がある」(東京外大)、「遅刻や欠席が極めて少なくなり、授業で指名した際に『わかりません』という回答が減った」(拓殖大)、「目標到達の確認のため、複数の課題を学生に課したことで、レポートなど提出物の質が上がった」(関西大)という各大学の評価も、朝日新聞の記事では提示されている。

個々の大学でも調査を始めている。立教大学経営学部は9月になって、「オンライン授業に関する学生意識調査」を公表した<sup>7</sup>。そこでは「双方向型授業に対する満足度は高い」一方、「一方向型授業や課題のみの授業に対する満足度はやや低い」傾向にあること、双方向型科目「BLP」(ビジネス・リーダーシップ・プログラム)の教育効果は対面授業(昨年)より高いこと、しかし、今後の授業の形態としては、小規模型・双方向型授業では対面授業を希望する学生の割合が高い一方、大規模型・一方向型授業ではオンライン授業の継続を望む学生の割合が高いことが示されている。一方向型授業や課題のみの授業に比して、双方向型授業に対する満足度が高い傾向があるにもかかわらず、今後の授業の形態としてはむしろ対面授業への希望が多いことについての説明はないが、オンライン授業が一定の成果を上げたことは間違いない。

一方、慶應義塾大学環境情報学部の植原啓介准教授が発表した「慶應SFCにおける遠隔授業とアンケート調査結果」は、5月7日から18日の間に同大学の湘南藤沢キャンパス(SFC)の教員117名と学生377名に行った調査の結果を示している<sup>8</sup>。同キャンパスでは殆どの科目が同時双方向型授業で、それに加えてオンデマンド型の授業も行われていた。調査が実施されたのは、まだ



オンライン授業が始まって1カ月足らずの時期であるが、アンケート結果では、オンライン授業に対して教員より学生の方が好意的であり、学生の約7割が、平常化してもオンライン授業が継続されることを希望している。具体的にオンライン授業の良い点として学生が挙げているのは、「周りに気を使わないですむ」、「集中力が上がる」、「言語の授業で周りを気にすること無く発声してみることができる」、「チャットの方が質問・発言がしやすい」といったことであり、教師の側からも「チャットなどが使えるのでコミュニケーションが活発になった」、「スライドなどが学生の目の前で見せられる」等の肯定的評価があった<sup>9</sup>。学生と教員間の意思疎通を不安視する意見と、チャットを使うことで普段よりコミュニケーションが円滑になったという意見はどちらも多い。その一方、教員・学生共に学生の通信環境を懸念しており、具体的に「接触不良で欠席になるのが困る」、「ツールが安定しない」という指摘も学生から出されている。

同じ慶應義塾大学の日吉キャンパスでは、前期末の7月28日～8月6日に10451名の学生（1・2年生）を対象にアンケート調査が行われた<sup>10</sup>。これによれば、回答者の5割弱が「頻繁に」または「時々」通信環境・機器のトラブルを経験しており（その多くは自力で対応して解決している）、やはりオンライン授業では通信環境の安定が重要であることが判る。また、授業の教材学習・課題作成・試験対策に十分な勉強時間を確保できたかという質問に対しては、1年生の56.1%、2年生の48.8%が「少し」ないし「まったく」時間が足りなかったと回答し、両学年共にそう答えた学生の7割以上が「授業で出された課題が多すぎた」ことを理由に挙げている。2年生の64.9%が2019年度秋学期（つまり後期）よりも勉強時間が「大幅に増えた」としている背景にも、同じ理由があろう。一方、授業から得られる情報量の多さという評価基準でオンデマンド型の授業が最も高く評価され、知的成長の実感という評価基準でも、教室での授業と拮抗してオンデマンド型授業が評価されている一方、同時双方向型授業が、「コミュニケーションの楽しさ」という評価基準での評価は高いものの、それ以外の点ではオンデマンド型の授業よりも評価が低い点は、立教大学や湘南藤沢キャンパスの調査と比較して興味深い。

この調査でも、オンライン授業において学生同士のコミュニケーションの不足が生じる傾向は現れている。特に1年生は友人関係を築く前にオンライン授業となってしまったため、2年生に比べて授業についての情報を交換するような学内の知人が少ない傾向にある。おそらくそのため、平常化後に希望する授業形態として、1年生の56.9%が「主に教室での授業を受講したい」としており、教室での授業を希望する2年生が38.1%であるのとは大きな差がある。実際、教室での授業の希望者が教員や友人との直接交流を願っていることが、自由回答の記述か

らうかがえるという。一方、教室での授業以外の形を希望した学生でも、「主にリアルタイム形式のオンライン授業を受講したい」とした者、すなわち同時双方向型授業を希望する者は1年生で1.6%、2年生でも1.8%に過ぎず、対して「映像・音声のオンデマンド配信形式のオンライン授業」の希望者は1年生で16.2%、2年生で26.1%であった。調査では、オンデマンド型の授業の希望者には、通学に時間を要さず、自分のペースで受講できるという利便性を重視する傾向があると結論している。

## V. 考察

前節のような他大学での調査結果を参照しながら、授業者が実施したオンライン授業に対する受講者の評価を検討し、オンラインでの授業の利点・欠点について若干の考察を行う。

質問11への回答を見ると、オンライン授業については3割の受講者（11名）が好意的に受け取っており、対面の方が良かったとする受講者と同数である。またオンラインゆえにむしろ丁寧に勉強できた、あるいは解りやすかったという感想も見られる。「授業内容はむしろひとりひとり平等にフォーカスされる機会が与えられているので、よかったのではないかと思う」、「対面授業よりも疑問に思ったことや分からなかったことを聞きやすかったように思う」、「非対面であることによって、質問がしやすいというメリットはあったと思う」という感想は、オンライン授業の活用方向性を示している。慶應大学SFCの調査では「チャットの方が質問・発言がしやすい」（学生側）、「チャットなどが使えるのでコミュニケーションが活発になった」（教員側）という意見が見られ、朝日新聞・河合塾の共同調査でも東京外国語大学からの「学生からはオンラインの方がかえって発言しやすいという声がある」という指摘が提示されている。

また、「チャットの方が他の人の意見が通常よりも出ている印象があり、他の人の考えを聞くことで自分の考えを深めたり新たな見方を得ることができた」という意見に見るように、自分以外の様々な意見や視点を一覽で参照できることは、受講者にとっては刺激になったようであり、実際、対面で意見を言わせたり書かせたりする場合よりも、受講者は積極的に自分の意見をチャットに書き込んでいた。同時双方向型の授業において授業者と受講者は一対多の関係であるが、各受講者の実感としては画面を介して授業者と一対一で向かっている。それは他の学生の様子が分からないという孤立感にもつながり得る反面、周囲を気にせずに集中できるということでもある。「資料がみやすかった。集中できた。分からない部分について自分なりに調べることができた」、「授業の振り返りで質問する機会が十分に設けられていて、対面授業よりも分からないことや疑問に思ったことを聞ける」といった感想は、受講者と教師が一対一で向き合う形になるオンラインの利点をよく示している。慶應義

塾大学 SFC の調査でオンラインの利点として挙げられていた「言語の授業で周りを気にすること無く発声してみることができる」という意見も、そうした文脈で理解できよう。

しかし、こうした利点は受講者の環境によっては欠点にもなり得る。安定した通信環境と PC の用意があれば、「Zoom だと、スライドがみやすく授業後の振り返りで理解できなかった部分については質問することができる」、「ノートパソコンで授業を受けながらデスクトップパソコンでノートがとれたので、振り返りを書くときに授業ノートを参照しやすく効果的に復習できた」という状態を実現できる。資料を画面で見られるなら、鮮明なカラー図像や写真を見ることもできる。しかし、「音声途切れることがあったし、画面を見ているのと目の前で、対面で授業をきけるのでは集中力の持ち具合が異なった」、「音声途切れたり、目が疲れてしまったり、集中力が対面の時よりも持ちにくかったりした」という環境に置かれていた学生の精神的負担は小さくならなかったろう。こうしたネット環境に関するストレスは、オンライン授業を始める段階で懸念・議論されていたことであり、今後、遠隔授業を行う場合には最も配慮しなければならない点の一つである。また「非対面であるから質問がしやすい」という回答がある一方で、「授業中に質問するのははばかれるように思った」という感想もある。もちろん、授業中には遠慮なく講義を遮って質問して構わない、あるいはチャットで質問をしてもいいと繰り返し伝えてはいるが、受講者によって受け止め方が異なることは避けられない。

対面授業の方が良かったという回答の理由を見ると、ネット環境の不安定さ以外には、授業中に参考として提示した書物や貨幣などの実物に触れることができなかったことへの不満が出されているが、絶対的に対面でないという意見はない。授業中に問題の検討や多少の議論をするにしても、基本的には講義形式を取る授業においては、オンライン授業を活用する余地は大きいということであろう。教員が資料を示しながら講義をする形態の授業では、対面でも非対面でもそれほど差異はないという受講者の意見は、正鵠を射ている。

ところで慶應義塾大学日吉キャンパスの調査では、1・2年生を合わせて全回答者の4割以上が、授業の課題が多過ぎたために勉強時間が足りなかったと回答している。特にオンデマンド型授業では学習の確認のために課題が出される傾向があり、各教員はそれぞれ配慮したにしても、そうした授業を複数受講する学生は、課題が累積して負担となったのであろう。筆者のアンケートでは、時間数の不足への言及はなかったが、授業の振り返りを Word で作成することについて「作成するのにかなり時間がかかるので、負担は大きかった」という意見があった。しかし、その意見を書してくれた回答者を含めて大半の回答者が、振り返りの有用性については肯定的に評

価した。実際の毎時の振り返りの内容を見れば、受講者によっては、義務として仕方なく最低限のことを書いて提出したと如実に判るようなものもあったが、学期末に提出させた最終レポートの内容を見ると、例年に比べて平均的な理解度が高い傾向にあり、振り返りとそれへの回答は有効に機能していたことがうかがえる。質問12の回答での具体的記述に見られるように、授業のその場で振り返りを提出しないがゆえに、「自分の印象に残っている事柄をもう一度自分のなかで整理し、自分の言葉で表すことでより理解が深まった」、「その回で学んだことの復習にもなったし、わからなければ質問できるシステムになっていて、役立った」、「授業で学んだ内容に対して、自分の立場や意見をじっくり考えることにつながった」、「一度聞いただけではよくわからないこともあったので、自分でまとめなおすことで復習になった」、「授業を振り返ることで、その日に学んだことや理解したことを再度整理する機会となった」、「振り返りの際に資料やノートを見て再整理できたので、最終レポートの時に記憶が残っていたため書きやすかった」といった自習効果があったことは指摘できる。簡潔に慌ただしく授業内容をまとめるのではなく、時間をかけて復習し、その上で不明な点があれば質問してほしいと考えて、振り返りの提出に3日間の猶予を設けたが、実際に提出された振り返りを見ると、この意図に十分に応えてくれた受講者は少なくなく、それぞれが自分の疑問や関心を追究する時間を持っていることが確認できた。しばしば A4 数ページに及ぶ詳細な振り返りを提出してくる者もいた。

振り返りへの回答にしても、正直なところ、当初は受講者がどの程度まで内容を読んでくれるかという懸念もあったが、少なくともアンケートに回答した受講者の多くはこれを有効に活用している。特に「自分の分からなかったことが分かるようになったし、他の人の質問への回答も見られるシステムになっていたのが新たな気づきもあってとてもよかった」、「他の生徒がどのようなことを疑問に思ったのかを知ることが出来たり、他者の意見とそれに対する先生の回答やフィードバックを得られたりすることで、新たに学ぶことが増えた」、「他の人の疑問で自分が考えることのなかった内容を知ることができた」、「自分の気づけなかった疑問点も見つかることでさらに知識が増えた」等の意見に見られるように、各人が、他の学生の質問とそれへの回答・解説を共有しながら、自分の知識や理解を深めていた様子うかがえる。

対面で学生同士に議論させるような機会は勿論重要であるが、現時点で新型コロナウイルスの流行が今後どのようになるのか、対面授業がどの程度まで可能であるのかは確実でないなかで、むしろ「コロナ後」の一つの授業のあり方として、学生の自学自習とその活動への対応を振り返り用紙と回答という形で行いながら、授業に関する理解を補ってあげれば、学生の積極的な学習活動を促すことができる。質問14の「考えたか?」という質問

に対する回答を見ると、学生達はこちらの期待するような「思考」を必ずしも行っていないようにも見えるが、実際に提出された振り返り用紙の内容や、質問12や13への回答からは、積極的に授業に関わろうとする学生の姿も見出せる。

以上のことから、大学の歴史教育におけるオンライン授業の積極的活用の可能性が示唆される。歴史学という学問は、思考の土台として様々な知識や認識を必要とするが、それらの総てを授業中に与えることはおよそ不可能である。そのため補足資料を配布するなどの策を取るのであるが、膨大な資料を配れば、むしろそれだけ読んでもらえなくなる。また白黒の印刷物では画像・写真の鮮明度も低かった。しかし、対面授業にせよ同時双方向型のオンライン授業にせよ、授業はリアルタイムで行う一方で、一種のオンデマンド併用の形でMoodleを介して、今回のような数日の猶予を定めた振り返りの提出を行わせると共に、補足資料や振り返りへの回答を随時アップロードしておくことにより、受講者はより容易に、鮮明な資料を利用しながら自習ができる。情報量や画像の鮮明度などを考慮すると、必ずしも教室での対面授業を前提としないオンラインでの資料・情報提供は、より積極的に考えられるべきである。さらに、対面授業ではむしろ困難なものとして、チャットを使った相互の意見の参照、授業者と受講者のやり取りは、前述したように相互の意見を一覧できるという点で小さからぬ有用性を持っている。

勿論、今回のアンケートに回答した者は、元々ある程度熱心な受講者であり、そうした熱意のない学生に対してどう対応すれば効果的な授業ができるか、という点は考えていかねばならないが、3つの授業を通して最終レポートの平均的な完成度が高かったことは指摘でき、また毎回とまでは言わないまでも、振り返りに積極的に取り組んでいた受講者達の理解度が平準化していたことは、彼らのレポートを比較してもうかがえた。

さて、今期も、高等学校で世界史を履修しなかった受講者が数名いた。質問2)で高校時代に世界史を「未履修」と回答した者は、3つの授業を合わせた延べ回答者35名中5名で、割合は14.3%である(ただし2つの授業を履修している学生がいたので、実際の人数は4名である)。今年度の回答者は人間発達科学部の学生だけであるが、昨年度の同学部回答者で「未履修」の占める割合は18.8%であったため、数値は若干下がっている<sup>11</sup>。比較のために昨年度の調査の他学部(教養教育の授業が含まれており、人間発達科学部以外の学部のアンケート回答者が多数いた)を見ると、世界史「未履修」と回答した者が経済学部で27.3%、理学部で21.4%、工学部で30.6%の割合で存在しており<sup>12</sup>、本当は世界史を履修した学生が履修した事実を忘れてしまって「未履修」と回答したケースだけで割合が20%を超えていたとは考えがたい。少なくとも今年度の調査では、前述のように、

質問16によって回答者の記憶が信頼できることを検証している。実際、一人の学生は「一貫校で理系だったので中学2年以降世界史に触れて」いないと具体的に記述しているので、2006年に発覚した世界史「未履修問題」で文部科学省が是正を求めたにもかかわらず、理系を中心に必修科目である世界史(AまたはB)をカリキュラムに組み込んでいない高校(高等学校)が未だに存在する可能性が高く、そのことが去年までの数値にも現れていると考えられる。

また、質問3-b)で①と回答した、即ち世界史科目で世界史Aのみを履修した11名のうち、7名が質問3-c)で①「古代から近現代まで網羅的に学習した」と回答しており、近現代の学習が中心であるべき世界史Aが、大半の学校で学習指導要領通りに教えられていない実態も明白である。これらの学校では、在校生の多くが履修するであろう世界史Aについて、生徒が世界史の初学者であることを配慮して、網羅的な学習内容に変更されていることが予想される。

この点については、新学習指導要領における新科目「歴史総合」の登場によって、高等学校の現場では近現代中心の教授内容に変更せざるを得ないため、学習指導要領に沿わない「古代から近現代まで網羅的に学習」する状況は改善されるであろう。2018年告示の新指導要領を見ると、歴史総合については「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す」という目標が掲げられている。既に君島が指摘したように、この新科目はある意味で「歴史」という分野を越えた、「社会科」的な側面を持った科目となり得るものであり、それゆえに問題意識を持って歴史を見る、また現在の問題の解決を考える糸口にする、という側面が期待できるのは確かである<sup>13</sup>。しかしながら、その一方で、中学校時代に系統的な世界史の学習が行われていない現状では、古代や中世の世界史をどの段階で学ぶのか、という問題がむしろ新学習指導要領でも積み残したままになると言えるのではないか。

加えて、今回の調査では世界史未履修者全員が日本史を履修していたが、これまでの調査で取得したデータを見ると、2016年度は未履修者10名中の2名(20.0%)、2017年度は13名中4名(30.8%)、2018年度は同22名中14名(63.6%)、2019年度は31名中の20名(64.5%)が、日本史も履修していない<sup>14</sup>。つまり歴史に関わる科目を高等学校で一切学ばずに、大学に入学している。大学受験への対応を第一とせざるを得ない高等学校のあり方ゆえにこうした現状があることを考慮すると、世界史と日本史を統合した「歴史総合」の実施においても、同様のことが生じる懸念は十分にある。高等学校で「歴史」という科目を実質的に学んでいない状態の高校生が大学に

入学してくることは、今後も想定しておくべきであろう。

そうした学生への対応を考える上でも、上述したようなオンライン授業の利点を、知識や認識の補足、思考の援助の上で有効に利用することを考えていきたい。今回のアンケートで世界史を履修しなかったと答えた4名の学生は、日本史は履修したとのことであるので、高等学校で学ぶべき歴史認識の基本は修得していたかもしれないが、「あらゆる単語が初見なので理解が難しい」から世界史を履修していれば良かったという感想も漏らしつつ、振り返りを活用しながら主体的に学んでいた様子がかがえる。質問17に対して②（高校で世界史を学んでおけばよかったと感じたことはない）と回答した学生は、むしろ質問14には①（考えた）と答え、「私は高校で世界史を履修しなかったので、初めて知ることや学ぶことが多くありました。その分、揭示された情報や資料を見て、読んで、なんでだろう？と考えることも多かったです」と書いている。自分は一貫校の理系だったので世界史を履修しなかった、と回答した前述の学生は、オンライン授業を肯定的に評価しつつ、「ノートパソコンで授業を受けながらデスクトップパソコンでノートがとれたので、振り返りを書くときに授業ノートを参照しやすく効果的に復習できた」とし、振り返りについては「授業で取り上げる時代や地域の範囲が大きく変わるところで、振り返りの際に資料やノートを見て再整理できたので、最終レポートの時に記憶が残っていたため書きやすかった」と書いた学生である。世界史を（あるいは日本史も）履修していない学生に対しても、こうした形で十分に歴史を理解し、また考える機会を与えて学ばせることができるのである。

## VI. おわりに

今回は新型コロナウイルスの流行による非対面式授業という未曾有の事態の中で、授業を実施し、アンケート調査を行なった。アンケートの回答からは（対面よりもむしろ）積極的に学ぼうとする学生の姿が見える。

文部科学省は、秋以降の状況次第では遠隔授業もやむなしとしつつも、「大学設置基準第25条第1項が、主に教室等において対面で授業を行うことを想定していることに鑑み……感染対策を講じた上での面接授業の実施が適切と判断されるものについては面接授業の実施を検討して」ほしいという姿勢であり<sup>15</sup>、また実際、多くの大学が後期の授業を対面で実施する方向である。

しかし、最初に述べたように、今後は対面授業を絶対視するのではなく、多様な授業形態を考えていかなければならないであろう。2020年度前半の授業のあり方は、決して100パーセント満足するべきものではない。しかし、学生達の学習態度・意欲を見る限り、この機会をむしろ活用することを考えるべきである。

## 文献

- 君島和彦(2018):「新科目『歴史総合』とどう向き合うか」『地歴・公民資料』86号, 実教出版 (<http://www.jikkyo.co.jp/download/detail/29/9992999265>) (2019年6月3日ダウンロード)
- 国立情報学研究所(2014):『先端的学術研究・教育推進のための学術情報基盤～学術情報ネットワーク(SINET4)活用事例集～』, 国立情報学研究所学術基盤推進部
- 徳橋曜・小林真(2016):「高等学校の世界史教育と大学の歴史学—歴史教育の接続の観点から—」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』, 第11号, 143-157頁
- 徳橋曜(2017):「世界史教育の方向性と大学教育:『歴史総合』の新設を展望して」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』, 第12号, 149-160頁
- 徳橋曜(2018):「高等学校における歴史教育の状況:学生アンケートから」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』, 第13号, 119-132頁
- 徳橋曜(2019):「学生は大学の歴史教育に何を求めるか:学生アンケートから」富山大学人間発達科学研究実践総合センター『教育実践研究』, 第14号, 61-74頁
- 文部科学省(2018a):『高等学校指導要領』([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661\\_6\\_1\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf) ダウンロード2018年8月3日)
- 文部科学省(2018b):『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1407074.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1407074.htm) ダウンロード2018年8月20日)
- 文部科学省(2020):「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況」(2020年7月17日) ([https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf) ダウンロード2020年8月23日)

## 註

- 1 文部科学省「GIGA スクール構想の実現について」([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/other/index\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm) 最終閲覧2020年8月29日); 文部科学省「人口減少社会におけるICTの活用による教育の質の維持向上に係わる実証事業」([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1364592.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1364592.htm) 最終閲覧2020年8月23日)
- 2 学術情報システム SINET5 (web)「北陸三県の国立大学を結ぶ双方向遠隔授業システム」(2008年9月30

- 日) (<https://www.sinet.ad.jp/case/kanazawa> 最終閲覧 2020 年 8 月 18 日); 国立情報学研究所 (2014), pp. 68-70, 83-88。
- 3 <https://www.facebook.com/groups/146940180042907/>。なお、2020 年 9 月にグループ名は「新型コロナのインバクトを受け、大学教員は何をすべきか、何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ」に変更された。
  - 4 Business insider 「オンライン授業で学費は返還されるべきか。学生が署名運動に動いた ICU で起きたこととは？」(2020 年 4 月 28 日) (<https://www.businessinsider.jp/post-211994> 最終閲覧 2020 年 7 月 8 日); YAHOO! JAPAN ニュース「#学費返還運動」に苦慮する大学～就実・明治学院は神対応も」(2020 年 4 月 23 日) (<https://news.yahoo.co.jp/byline/ishiwatarireiji/20200423-00174838/> 最終閲覧日 2020 年 7 月 8 日)。こうした学費をめぐる議論は主に、各大学がオンライン授業を導入した直後に起こったが、アメリカ合衆国では 7 月に改めて半年間の講義を振り返って、学費返還訴訟が起こされている。ニューズウィーク日本版「学生が大学を訴える——質落ちたオンライン授業に『学費返せ』」(2020 年 7 月 31 日) (<https://www.newsweekjapan.jp/stories/woman/2020/07/post-423.php> 最終閲覧 2020 年 8 月 4 日)。
  - 5 文部科学省 (2020), 1 頁。
  - 6 朝日新聞 DIGITAL (2020) 「オンライン講義, 課題と手応え」(2020 年 8 月 24 日付) (<https://digital.asahi.com/articles/DA3S14595866.html?requesturl=articles%2FDA3S14595866.html&pn=4> 最終閲覧 2020 年 8 月 30 日)
  - 7 立教大学経営学部「オンライン授業に関する学生意識調査」(<https://www.rikkyo.ac.jp/news/2020/09/mknpps000001bg3b-att/report.pdf> 最終閲覧 2020 年 9 月 5 日)
  - 8 植原啓介「慶應 SFC における遠隔授業とアンケート調査結果」([https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200605-5\\_Uehara.pdf](https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200605-5_Uehara.pdf) 最終閲覧 2020 年 7 月 30 日)
  - 9 教員・学生の多くが利点として「キャンパスへの移動が無くなった」ことを挙げているが、これには同キャンパスの地理的条件が大きく反映している。
  - 10 慶應義塾大学日吉キャンパス 7 学部・日吉学生部「慶應義塾大学日吉キャンパスオンライン授業の受講状況に関するアンケート調査 (概要・集計結果報告)」(2020 年 9 月 10 日) (<https://www.students.keio.ac.jp/hy/class/registration/files/survey1.pdf> 及び <https://www.students.keio.ac.jp/hy/class/registration/files/survey2.pdf> 最終閲覧 2020 年 9 月 11 日)。
  - 11 徳橋曜 (2019), 70 頁。さらに過年度と比較すると、2016 年度は同学部の受講者 55 名中 10 名 (18.2%) が、2018 年度は同 25 名中 4 名 (16.0%) が未履修であった。なお、2017 年度は学部を特定していないのでデータが出せない。徳橋曜・小林真 (2016), 148-149, 154 頁; 徳橋曜 (2018), 121, 127-129 頁。
  - 12 徳橋曜 (2019), 69-70 頁。
  - 13 文部科学省 (2018a), 58-59 頁; 文部科学省 (2018b) 123 頁; 君島和彦 (2018) 13-15 頁。
  - 14 徳橋曜・小林真 (2016), 154 頁; 徳橋曜 (2017), 155-156 頁; 徳橋曜 (2018), 127-129 頁。なお、ここに示した 2019 年度の数値については、徳橋曜 (2019) には提示しておらず、今回改めてデータを確認したものである。
  - 15 文部科学省高等教育局大学振興課「本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について」(2020 年 7 月 27 日) ([https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) 最終閲覧 2020 年 8 月 22 日)。

(2020年 8 月31日受付)

(2020年 9 月30日受理)

図1 Zoomでの授業でのチャットの活用例（環境歴史学の授業から）

実際には“From”の後に発信者名が入っているので、誰がどのような発言をしているかを「机間巡視」できる。

11:30:46	From	: 経済の発展で木材需要が増えて森林が減少 増加は経済の衰退もしくは資源保護の意識
11:30:46	From	: 減少理由は人間による開墾・伐採、増加理由は資源を守る意識が高まったから
11:30:46	From	: 開墾のために伐採して森林減少、人が減って木材需要が低下したため森林増加
11:30:57	From	: 減少:資源の需要増加
11:30:59	From	: 減少:木材の需要の増加
11:31:01	From	: 減少・森林が多様に使われるようになったから 増加・管理して使い始めたから
11:31:04	From	: 減少・過剰伐採
11:31:06	From	: 減少 経済の発展
11:31:10	From	: 開墾による伐採により減少
11:31:16	From	: 回復した理由 人口の安定により需要の低下
11:31:17	From	: 森林を守ろうとする動きが強くなったから
11:31:17	From	: 森林伐採によって減り、増えた理由は資源を守るため
11:31:18	From	: 森林の伐採により減少し、保護意識の高まりにより増加
11:31:26	From	: 減少:伐採したから
11:31:30	From	: 木材の需要が増えたため、森林が減少した
11:31:43	From	: 増加・木の需要が減った
11:31:44	From	: 増加:周囲の都市の没落・過疎化
11:31:46	From	: 増加:保護活動の意識改革
11:31:48	From	: 減少は開墾や資源の需要の高まりから、増加は資源の確保や保存意識から
11:52:09	From	: 農民は移動手段に馬を使う
11:52:51	From	: 交通手段として馬が用いられていた 放牧場は駐車場のような役割も果たしていた
11:52:55	From	: 夜は通行できない森がある
11:52:57	From	: 農民が所領で得られる収入は少ない
11:52:57	From	: キリスト教が生活の中心にある
11:53:12	From	: 出稼ぎの概念があった
11:53:36	From	: 祭日に市が開かれ、農民も何かを売買して収入を得ていた
11:54:34	From	: 収入を増やすために市に出る必要があった
11:54:51	From	: 奇蹟伝として今にこの話が伝わるほどこの時代の人たちは聖人の力を信じていた。
11:55:17	From	: 修道士は困った人の相談先としての役割となっていた

図2 提出された「振り返り」の例

※ 学籍番号と氏名は消してある

a は世界システム概論の第 12 回の授業について提出された振り返りの一部である。この学生はこの時、4 ページにわたる振り返りを提出してきた。四角で囲んでコメントをつけた部分は、学生の誤解を授業者がチェックしたものの。

b はヨーロッパ地域史論の第 10 回の授業について、a とは別の学生が提出した振り返りである。過不足なくまとめられ、最後に感想が加えられている。

授業内容振り返り  
 授業名：世界システム概論 第（ 12 ）回  
 学籍番号：  
 氏名：

---

（以下に本文を記入せよ。1行40字で設定してあるので、字数の目安にすること。授業の内容に加えて、あなたの感じたこと、考えたことも書いてもらえると嬉しい）

1. ルネサンス  
 1-1 授業のまとめ

15世紀の教皇庁は安定し、地位を確立しており、カトリック世界全体から、十分の一税（ベキマ）を得ていた。これにより教皇庁は経済的に非常に潤っており、この財源は、ルネサンス（古代の再生）の発展に寄与した。ルネサンスとは、古代ギリシャやローマの文化を尊重し、理想とする動きであり、古代の美術、芸術、建築などを学び、現代に還元し、再現することである。この語句は、後世の歴史家によって編み出されたものではあるが、当時の人々には、自分たちが新しい時代を切り拓いているという実感があつたと考えられる。具体的には、古代の写本を漁り、絵画や彫刻の製作に生かしたり、権力者が発掘された古代の遺物を買集めたりしていた。このようなことを先頭立って行ったのが教皇庁であり、古代ギリシャやローマの文化に熱中していたとされる。しかし、極度な買い集めをしたことで、教会の財政は不安定になっていった。それにもかかわらず、サンピエトロ聖堂の全面改築を計画し、建築資金確保のために、贖宥状を作り、金貨一枚で販売した。贖宥状とは、持ってさえいれればすべての罪が許されるとされたものであり、考案したのはレオ10世である。また、ドイツで贖宥状を実際に売りさばいた人物としては、ヨハン・テツェルがあげられる。彼の売り文句として「グルデン金貨がお益でちやりんと呼んやいなや、たちまち魂は天国に飛び上がる」というものがあり、調子よく多くの人々に売っていったとされる（世界システム概論資料：p.23）。

1-2 感じたこと、考えたこと ※質問含む

農民が金貨一枚で、贖宥状を購入していたということに驚いた。農民の経済状況が安定していたということなのだろうか？私のイメージだと、貧しい、困窮しているといった印

a 世界システム概論の振り返り

授業内容振り返り  
 授業名 ヨーロッパ地域史論 第（ 10 ）回  
 学籍番号：  
 氏名： じ

---

（以下に本文を記入せよ。1行40字で設定してあるので、字数の目安にすること。授業の内容に加えて、あなたの感じたこと、考えたことも書いてもらえると嬉しい）

中世における結婚の目的は子孫を残すことや、人脈を広げることにあつた。そのため、本来キリスト教で離婚は禁止されているが、子どもをつくれぬ場合は神も許すので離婚が認められることもあつた。当時は母乳から母親の性格などいろいろなものが流れ込んでくるとされ、授乳や育児は乳母に任せられたり、里子に出して授乳期が終わると元の家へ引き取られた。女性は家同士をつないだり、子孫を残す手段として扱われ、弱い立場にあつた。じ

当時の行政区制度は、日常生活や信仰生活に密着したものを小教区、都市域の拡大に伴って変更する都市行政区とがあつた。また、公職抽選の時には隣人関係が影響を与えた。居住地区単位での予選候補者の指名の後、資格審査が行われ、合格者が選ばれ、さらに本候補者を選ぶ抽選が行われた。地区ごとの指名において、その地区の有力者の恣意や近隣からの人物評価が影響しており、人脈が重要となつた。その一つに友人関係がある。友人関係を利用して人脈を広げ、コネを持つた。バルトロメオは自分の地区に有力者のコネがなかったため、友人を頼る必要があつた。また、友人の友人も友人という考えがあり、姻族や隣人、知人、パトロン、クライアント、面識のない人まで混在し、その概念は曖昧なものとなつていた。血族や階層を超えて人脈が拡大していき、異なる人脈を結びつけるネットワークの結節点となり、利益獲得のための有力者となつたりを持つパトロネジの連鎖が進んだ。アミチーティアには、精神的な交友・家族的信仰・本来の意味での友情と、打算的なコネクションという二面性を兼ね備えていた。じ

当時の友人というものが、現代とは異なる使い方をされていて驚いた。見知らぬ人まで友人の枠に入れるとすると、友人の数は目には見えないし、数えきれないくらい多数なのかと思つた。当時は自分の利益のための友人関係への依存が今よりも顕著でよくあることなのかと感じた。じ

b ヨーロッパ地域史論の振り返り